

ハルナック『キリスト教の本質』に対するレオ・ベックの批判 —— 二十世紀ドイツの教義史研究におけるキリスト教本質論の問題¹ ——

津田 謙治

1. 問題提起

アドルフ・フォン・ハルナック（1851-1930）が19世紀の終わりに呈示した「キリスト教の本質」に対する問いは、キリスト教内部に留まらず、宗教そのものの本質は何かという問題と関連しながら、100年以上経過した現在においても重要な意味を保持している。しかし、この問いそれ自体はある種の典型的な役割を担うとしても、当時ハルナックが行ったアプローチは、一人の教会史家が一つの試みとして呈示したものであり、視点や資料の制約が指摘されることは不可避であった。

もっとも、ハルナックの場合、浩瀚な大著『教義史教本²』などから推測されるように、膨大な教義学的研究と知識の蓄積の上に構築された議論が『キリスト教の本質³』という書物に集約されていた。それだけに、この講義録が呈示した「キリスト教の本質」の素描は、異彩と輝きをもって全世界の読者を魅了することが可能となったと言える。

これに対して、オッペルン（現ポーランドのオポーレ）のラビであったレオ・ベック（1873-1956）はハルナックのこの書物に異議を唱え、ハルナックの論ずる『キリスト教の本質』に欠けているものを鋭く浮き彫りにした。結論を先取りするならば、ここでベックが問題としたのは一つの宗教の本質を論じる歴史家の姿勢と、この議論が誤った歴史理解に基づいている点である。本稿では、ベックの視点を通じてハルナックの主張を簡潔に素描した後、それに対するベックの論駁が何処に向けられているかを具体的に分析し、ベックがその批判によって目指そうとした方向性を考察してみたい。

2. ベックの批判論文の位置付け

ベックの議論に入る前に、彼による『キリスト教の本質』批判論文⁴の外面的な部分を粗描しておきたい。

ハルナックは1851年に生まれ、1899年から1900年にかけてベルリン大学で行った講義をもとに『キリスト教の本質』を公にした（1900年）。ベックの批判を受けた時（1901年）、ハルナックはちょうど50代に差し掛かるころであった。他方で、レオ・

ベックは 1873 年に生まれており、ハルナックのこの書を読んで最初の批判論文を書き上げたのは、まだ 30 歳に満たない若さであった。

ベックの批判論文が掲載されたのは、「ユダヤ史とユダヤ学」と題される月刊学術誌（*Monatsschrift für Geschichte und Wissenschaft des Judenthums*）の 1901 年第 2 巻である。この学術誌は 1851 年に創刊された後、約二ヶ月おきに出版され、それは 1939 年まで続けられた。1901 年にベックが論文を著した時点で、この学術誌は創刊 50 年を迎えており、1901 年版は 600 頁ほどの分量で、ベックの論文はその内の 24 頁を占め、この他の研究者の論文としてはタルムードの解釈、割礼の研究などが載せられている。

ブレスラウで出版されたこのベックの論文は、ハルナックの『キリスト教の本質』に対するユダヤ教側の批判の代表的なものの一つと見なされているが⁵、ハルナックによる直接的な応答や両者の会談が実現された形跡はない⁶。尚、ハルナック自身は自らの書物に対する批判を意識しながらも、『キリスト教の本質』が一つの時代の中に制約された講義であることを強調し、批判を咀嚼して本文等を発展的に修正することはしなかった⁷。

他方で、ベックはハルナックの議論に対する批判を継続的に行い、1901 年の論文を若干拡張したものを 1902 年に発表し⁸、さらにその 3 年後の 1905 年には『キリスト教の本質』によって歪められたユダヤ教の位置付けを再構築するべく、『ユダヤ教の本質』を著した⁹。この書は直接的にハルナックの『キリスト教の本質』を批判する意図をもっているわけではないが、ハルナックの著作に対する批判を契機の一つとしていることは明確である¹⁰。1905 年に出版された『ユダヤ教の本質』は、改訂第二版が 1922 年に公にされた後、索引が付加された第三版が 1923 年、そしてベックの存命中に第六版（1932/1933 年）までが出版された¹¹。

3. ベックが捉えたハルナックの『キリスト教の本質』

ハルナックがベルリン大学の全学部生向けに行った講義を基盤としてまとめられた『キリスト教の本質』は、議論の枠組み自体は極めて明白であった。ハルナックが呈示したこの書の問いは「キリスト教とは何か¹²」であり、この問いに対して「歴史学を手段として、また経験された歴史から獲得された生の体験によって解答を試みる¹³」ことを彼は主眼に置いている。その際に、「弁証論的かつ宗教哲学的考察」は除外すると彼は述べており、ベックもこの点に留意しているが、ハルナックが実質的には弁証論的な議論を展開していることにベックは批判を向けている¹⁴。

ベックに拠れば、ハルナックの議論においては、キリスト教の中心をなすイエスの宣教から、互いに関連・包括する三つの主要な領域が指摘される。それは次のものである。

1. 「神の国とその到来」
2. 「父なる神と人間靈魂の無限の価値」

3. 「より優れた正義と愛の命令」

福音の中に見出されるその他のものは、実質的には福音とは無関係のものとなる。例えば、禁欲的生活や財産所有の否定などは、福音の核心ではない。そして、ハルナックがキリスト教の本質として見出した最終的な結論は、「神を父として認識し、知覚すること、救済の確信、神において恭順し喜びを感じることを、行動と兄弟愛」という事柄すべてが、これらを宣べ伝えたイエス・キリストと結び付けられている点にあるとベックは理解している¹⁵。

このような、『キリスト教の本質』においてベックが理解した重要な論点は、特に異質なものではなく、むしろ極めて一般的な解釈である¹⁶。この解釈を基礎として、ベックはハルナックに対して特に三つの視点から批判を行っている。それは、ハルナックが依拠した歴史家としての本質探求の態度と、その過程で表出されたファリサイ派理解、そしてイエスの福音と旧約的文脈との分断であり、特に第三の視点は残りの二つのものとも深く関連している。これらの視点がハルナックの著書の根源的な部分に疑義と揺さ振りを投げ掛けているのである。

4. 歴史的方法と弁証家の立場の混同

ハルナックが目指した、「歴史家」としての立場から「キリスト教の本質」を探求する姿勢それ自体は、ベック自身が目指すものと大きく異なるものではない。しかし、ハルナックが「歴史家」の立場を掲げながらも弁証論を書くならば、彼の方法論は単なる理想論に陥ることになる。彼が「歴史家」としての姿勢を忘れて「歴史」的な書物を著した点にベックは批判を向けている。

ベックに拠れば、「歴史家」、特に「宗教史家」にとって忘れてはならないのは、次の「二種類の事柄」を「注意深く区別」する点である。それはすなわち、「かの〔イエス・キリストの〕時代にとつて大きな意味をもっていたのは何であったか、そして、この目的が達せられたならば、そこから見て、今日の宗教史家自身が〔er (= Religionshistoriker) selber heute〕それに対してどのように判断するか」¹⁷である。ベックの理解に従うならば、ハルナックはこの二つの事柄を常に厳格に区別していた訳ではなかったとされる。

歴史家は語るだけでなく、判断し、それどころか〔場合によっては〕一方に加担し、擁護し、他方を弾劾すること〔もあるの〕は明白である。しかし歴史家は、自らの判断を、叙述している時代の判断と混同してはならない。歴史家は自分の価値概念を、かの遠い過去に対して造り上げてはならないし、「何が重要で、何が重要でないか」の評価が、自分が今日用いているのと同じ規準に従って当時にも付与されないと考えてもならない。「時間は変化し、我々はその中で変化する」(Tempera

mutantur et nos mutamur in illis) [からである]。歴史家が現在という立脚点から、ある事柄を非本質的なものとして判断するとしても、[もしかしたら] その事柄は、この者が記述する時間[即ち、かの時代]において、極めて重要で意義深いものであったかも知れない。歴史家はその事柄を非難し、また遺憾に感じることもあるかも知れないが、だからといってそれを、かの時代において拒絶してはならない。歴史的な事実の確認の際に —— ある人物とある世紀の思考様式が一つの歴史的事実でもあるが —— 、歴史家の価値判断は決定的なものであってはならない (Baeck [1901], S.98-99)。

ハルナックに当て嵌めるならば、19 世紀末から 20 世紀初頭の転換期の歴史家である彼が、自分の時代の価値観を最初期キリスト教の 1 世紀の時代に持ち込むことは誤りである。ハルナックは芸術家が持つような「活けるものに対する鮮明な眼差し」¹⁸によって本質を見分けることを主張する。恐らくこれは現代の歴史家が自らの時代の視点に囚われずに過去の時代を見渡すことを指しているが、その眼差しは頻繁に歴史家たちを欺いてきたとされる。場合によっては、歴史家の捉える芸術的な要求と歴史的事実が矛盾することもあるが、バックに拠れば、その時に初めて歴史家は「本質的なもの」ないしは「不変なもの」を問うことができる。「本質的なもの」を訴求するために、歴史的事実を無視して芸術的な要求を優先させるのではない。したがって、ハルナックの述べるように、「眼差し」を持つ者もしくは持つと自認する者が無批判に福音の核心を看破できるということではない¹⁹。

例えば、先程確認したように、ハルナックはイエスの宣教の中心の一つに「神の国とその到来」を据えている。その際に、「旧約的色彩の強い審判の日という思想」に「イエスの宣教によって始まる神の国の到来思想」が接続し、後者がキリスト教の本質を為すものと分析されている。ここでは、旧約的要素と等しい「同時代の人々と共通の思想」の中に、偉大なイエスの教えをすべて還元するようなやり方は、「事物を転倒」しており、誤りであるとハルナックは理解している²⁰。しかし、バックに拠れば、まさにこのような思考そのものが「歴史家」としての資格を喪失するものと見なされる。ハルナックは「自分にとって」(つまり、「今日の宗教史家自身」にとって) 最も心に訴えたものを語っているのであって、「かの時代にとって」意味を持っていたものを蔑ろにしており(もしくは「混同」しており)、そのやり方は「歴史家」ではなく「弁証家」のものである。つまり、今日のキリスト教の弁証を優先して、歴史的な理解をおざなりにしており、このようなハルナックの立場は歴史的叙述から程遠いものである²¹。

こうした議論に加えて、「イエスの宣教は反世界的ではなく」、「福音が国家の法秩序を絶対的に拒絶して」いるのでもない点、そしてイエスが『悪人に手向かってはならない』[マタイによる福音書 5:39] と述べた箇所を刑罰とは無関係に理解しようとした点(す

なわち、犯罪を助長させる可能性を無視した点）など、ハルナックが弁証的にイエスの時代のキリスト教を理解する例をベックは次々と挙げている²²。これらすべてが指し示すものは、19世紀末もしくは20世紀初頭の価値概念が容易くイエスの時代に用いられ、歴史家の判断と弁証家の護教が取り違えられているということである。

すでに挙げた証拠は、歴史叙述家の裁判権が弁証家の護教権と取り違えられていることを示している。その手法は、これらの証拠を通じて十分に素描された。ハルナックが、最初からこの命題に固執しているという印象がもたれている。その命題が保持するものを本質的なものと見なし、他のすべてのものを副次的なものと彼は見なすのである。彼が描写する宗教は、世界否定や世界逃避に関するものを、法秩序と権力闘争の否定に関するものを、貧困を称賛するものを、家族の繋がりに対して冷淡なものを、一切内包しておらず、その代わりに多くの他の美しいものが含まれている。それはハルナックの信仰告白であって、我々に対して表出され、それによって誰もが彼を尊敬するであろう。しかし、そのためにハルナックの宗教をイエスの宗教として説明しようと望むことは、少なくとも歴史的ではない（Baeck [1901] S.103）。

ハルナックは、イエスの宣教と福音がもつ意義と新しさを弁証する目的のために、旧約的な文脈を無視し、また当時の価値概念を転倒させ、歪曲した。ベックはここで、歴史家の視点をかの時代の事柄に当て嵌めることを「近代化」（Modernisierung）という言葉を用いて表現している²³。ベックの批判は、ハルナックがイエスの宣教の時代を弁証家として「近代化」しただけでなく、それを「歴史的な」見地と履き違えて、「キリスト教の本質」を描き出した点に向けられている。

5. ファリサイ派に関する偏見と無理解

ベックに拠れば、先の節で見たような、ハルナックの「歴史家」としての態度の欠如は、歴史的資料としての福音の誤った解釈など、様々な部分から導き出される。ベックが最も問題視して取り上げているのは、「イエスと同時代のユダヤ教やそれ以前の数百年のユダヤ教の状態に関する歴史を証明することに、ハルナックがほとんどの場合において無関心である²⁴」ことであって、これは「教義史を著したこの人物」にとって致命的なものである。

特にそれが顕著なのは、ハルナックの描く「ファリサイ派」の表象である²⁵。ファリサイ派はユダヤ「民族の公的な指導者」であって、「彼らは神を、組織内規則の儀式を監視する専制君主として想定した」²⁶とハルナックは理解した。彼に拠れば、ファリサイ派は

律法の中に神を見て、神の無数の命令を民衆に説き、それを遵守させることに終始し、宗教を世俗的な事柄に変えてしまった。これに対して、イエスは全く逆の立場に立ったとハルナックは指摘した²⁷。しかし、このような理解は、ハルナックがタルムードなどを表面的になぞり、イエスとファリサイ派の立場を対照法的に議論するために「勝手に妄想を用いて描き出した」イメージであるとベックは糾弾する。

ハルナックは自分の主張に対して、何か一つでも、ほんの僅かな証拠でも見出したのだろうか。これ〔ファリサイ派の表象〕は、ハルナックが示そうとした図像に鏡像として呈示するために自分ででっち上げたものである。「彼ら〔ファリサイ派〕は、隘路の迷宮、誤った道、隠された出口に対して作っておいた自分たちの法の中に、それを見ていた²⁸」と、教義史を著したこの人物は書いている。それをきちんとした文書で見たのでなければ、そのようなことは信じられないであろう。ハルナックは〔イエスの福音と〕反対の事柄を知るために、かの時代の文学を一瞥したに過ぎない。タルムードが語り、その書物について既に教えることが可能であったほぼすべてのファリサイ派の指導者たちがもっていた、崇高な宗教的かつ道徳的教説について、ハルナックは何も知らないのではないだろうか (Baeck [1901], S.106)。

ベックに拠れば、ハルナックのファリサイ派に対する無理解もしくは無関心からなる知識の欠如は、律法によって命じられるユダヤ人の行為（例えば隣人愛の実践など）の中に道徳的な側面を見なかったことに起因している。ユダヤ人が隣人を助けるのは、神が律法によって命じているからであり、このことを説くファリサイ派の人たちは、内面的な愛によって隣人を助けることを説くイエスに対比される。しかし、ベックに拠れば、このようなハルナックのファリサイ派理解は誤りである。

ファリサイ派について歪んだ判断を行ったハルナックの根本的な誤りは、次の点に原因がある。それは即ち、律法上または儀式上の個々の問いと、宗教的かつ道徳的見解との間を彼が区別しなかった点である。それはハラハーとアッガダーとを殆ど〔混同して〕一つにしているのであって ―― 後者は広い意味で理解される ――、その結果、それらの問いはあらゆる道徳的かつ宗教的考察を含んでしまっている。そのために、更にこれから示されていくように、二つの全く異なった領域が完全に相互に入り込んでおり、結果的にイエスの道徳的な見解と、ファリサイ派の道徳的な見解とが対比されているのではなく、法律のかつ儀式的な決断が対比されているのである (Baeck [1901], S.108-109)。

ハルナックの歪んだファリサイ派理解の原因は、律法や儀式に関する規則的なもの（ハ

ラハー）と、それらが導き出される道徳的・宗教的な聖書解釈（アッガダー）をハルナックが区別しなかった点にあるとベックは分析する。イエスの道徳的見解と、ファリサイ派の説いたアッガダーとを並べて比較するならば考察として成り立つが、ハルナックが行ったようにここでハラハーを並べて比較してみても、両者が全く別の性質を持つのは当然である。ベックの挙げる例に従うならば、仏教徒が仏陀の崇高な教説と、キリスト教の聖職者の服装や安息日の施行などの規則を比較して、キリスト教徒には内面的な行為が欠けていると理解することは奇異である。したがって、ハルナックのように、イエスの説く教説と「狭隘な迷路」のような律法とを比較し、それを機械的に命じるファリサイ派の姿を専制君主的な存在と見なして、これと対照的に愛を説くイエスの存在を持ち出すことは明らかに方法論的に誤っているとベックは指摘している²⁹。

このことに加えて、ベックに拠れば、ハルナックはイエスとファリサイ派の立場を対比させるために、ファリサイ派が貧者に対して冷淡であった点を指摘している。

ここで言及した特性の他に、ハルナックはファリサイ派において更に様々な他の否定的な特徴を見出している。「とりわけ、ファリサイ派や聖職者も属していた支配的階級は —— 貧しい民族の窮状に殆ど心をかけなかった。あらゆる時代とあらゆる民族においてそのような階級の間で見られるものよりも酷いということはなかったようであるが、それでもそれは酷いものであった。ここで更に付け加えられるのは、儀式と儀式の「正当性」についての関心が、貧困への同情と慈悲よりも優先したことである」（ハルナック『キリスト教の本質』58 頁）。これらすべては単なる想像と捏造である（Baeck [1901], S.111）。

ハルナックに拠れば、ファリサイ派は、律法などの規則の妥当性を優先したために、貧しい人々に十分に目を向けなかった。また、ファリサイ派は支配階級に属し、豊かな者たちの保護と関心に目を向けていた。これとは反対に、イエスは豊かな者たちを非難し、貧しい者たちに語ったとされている。しかし、ベックはこのようなファリサイ派理解を部分的には捏造であり、また部分的には一面的な理解として退けて、実際にはファリサイ派がこの時代に貧民の救済を説いたことを様々な点から例証している。例えばタミード（常供の献げ物）は、「民族『全体』の名において、ある意味では貧しい者やその中でも最も貧しい者によって献げられる」のであって、ファリサイ派が貧者を儀式やその恵みから排除しないしは無視したというのは誤りである。「この時代の歴史において、貧しい者を活動的に保護することや、またこれらの者たちに与えられた権利救済は明らか」であり、「ファリサイ派の文献の全体を通じて、貧困に対する敬意は一貫」していた。したがって、貧しい者たちが抑圧され、圧迫を受けていたというのは、ハルナックが福音の意義のために描いた「空想上の背景」であったとされる³⁰。

6. ユダヤ的伝統からの福音の分離

先に見た二つの視点からの批判は、旧約的伝統からイエスの宣教と福音を引き離し、キリスト教の独自性を弁証するハルナックの姿勢に結び付いている。「福音は決して他の〔宗教の〕ような既成の宗教ではなく、また律法的なもの³¹でも偏狭的なものでもなく、それゆえにそれ〔福音〕は宗教そのものなのである」とするハルナックの見解³²は、ユダヤ的伝統の上にキリスト教が立脚することを否認しているように見える。

しかし、ベックはむしろ、イエスとその福音の立場を旧約的な価値観に基づくものと見なしている。例えば前節で確認したファリサイ派と貧困に関連して、ベックは「イエスは豊かな者たちを非難するよりもむしろ、豊かさを非難し、とりわけ貧しい者たちを元気づけようとしている³³」のであって、その立場は貧困を肯定的なものに見なす旧約の預言者のものに近いものと理解する。

彼〔イエス〕は預言者に従って、価値概念を再評価し、貧困を善いものとして、貧しい者たちを善い者たちとして説明している。貧困は負担ではなく、天の国への義務と道である。財産を獲得することを、貧しい者は求めてはならない。これに対して、豊かな者の使命は、自らの宝を前に差し出し、貧しくなることである³⁴。というのも、それは至福のための最初の条件だからである。自分の富を手放さず、増やす富者は、そのことによって天の国への道を閉ざしている。豊かな者ではなく、貧しい者が幸福であるべきである。貧しくなり、そうあり続けることは、望ましい目標である。これは貧困と富についての福音の見解である (Baeck [1901], S.112)。

イエスが貧しい者たちに目を向け、貧しくあるべきことを説いたことは福音書に書かれている通りである。しかしこのことから、ファリサイ派や聖職者の属する支配者階級や富んでいる者をイエスが批判したと捉えるべきではなく、むしろイエスは富に固執する態度を戒め、貧しい者こそが天の国へと開かれていることを説いたとベックは理解する。これも、前節で見たように、ファリサイ派が貧しい者を保護し、彼らに敬意を払った事柄と重なっている³⁵。従って、イエスとファリサイ派の立場を正反対のものとして対比することは、この時代の歴史性やユダヤ教とキリスト教の連関を著しく無視し、福音の解釈をも歪めた見解であって、ハルナックが「歴史家」よりも「弁証家」の立場を取った証左がここでも示されているとベックは理解する³⁶。

ベックがこのような批判を通じて、その先に見ようとしていたものは、イエスの存在とユダヤ教世界との強い関連性であった。ハルナックのように、当時のキリスト教の教義史家もしくはユダヤ教研究者には、イエスの福音の独自性を強調し、イエスのユダヤ的な側

面については沈黙する傾向があるとされている³⁷。しかし、本来「歴史」的に「キリスト教の本質」を見ようとするならば、まさにこのユダヤ的な側面に目を向けなければならない。

イエスの生を描いた者の殆どは、イエスがそのあらゆる特徴において完全に真にユダヤ的な人物であったこと、そしてユダヤ教の地においてのみ、他の地ではなくまさにそこにおいて育った人間であったということを示唆するのを控えている。イエスは真にユダヤ的な人物であって、イエスの努力と行為、感情と感覚、語りと沈黙は、ユダヤ的な刻印を、ユダヤの理想の特徴を、ユダヤ教の中にあり、当時はユダヤ教の中にしかなかったものの最上の特徴を担っている。イエスはユダヤ人の中のユダヤ人であった。他の民族から、イエスのような人間は現れなかったであろうし、他の民族において、イエスのように活動する人間もいなかったであろう。そして、他の民族において、自分を信じる使徒を、イエスは見出さなかったであろう。——イエスの人格を生んだこのような土地柄に、ハルナックは眼差しを向けなかった。これらが、ハルナックの書物の根本的な誤りである。即ち、弁証論的な意図、ユダヤ文学とユダヤ学の考慮不足である (Baeck [1901], S.118)。

もっとも、ベックはイエスのもつユダヤ教的色彩を強調することによって、イエスとその福音の独自性を希釈しようとしたのではない。レビ記の隣人愛³⁸や、イザヤ書に見られるメシアの贖いの受難³⁹、その他多くのユダヤ人の遺産を看過し、意図的にこの時代のユダヤ教から排除しようとすることは、少なくとも「歴史家」には許されないことである。ユダヤ教的要素はキリスト教的なものとは対立するのではなく、むしろユダヤ教はキリスト教が発展した基盤であって、その発展を尊敬と共に好意的に捉えてきたことをベックは指摘する。

キリスト教の創唱者に対して、ユダヤ教は既に愛と尊敬の念を抱いていた。キリスト教に対してユダヤ教が憎悪を抱いていたという作り話が頻繁になされてきた。しかし、そのようなものは無かった。母が子どもを憎むことはないが、子どもが自らの母を忘れ、否定することはある。痛ましいことであるが、キリスト教は自らの創唱者の精神について、極めて僅かにしか示してこなかった。新約聖書の譬えの中には、深い意味がある。「ある男に二人の息子がおり、彼は一方に向かって行き、こう話した。息子よ、私の葡萄畑に行って、今日は働きなさい。息子は、主よ、私は行きますと答えたが、そこには行かなかった……」⁴⁰。このキリスト教の話の中の事柄が、しばしば現実となっている。しかし、世界の歴史に関わる使命を力強く実現し、依然として実現し続けるこの宗教を、そして何百万もの人々を幸福にし、

慰撫し、立ち上がらせたこの信仰を認めず、もしくは傷付け、蔑むようなことは、特にユダヤ教神学にはそぐわない。またユダヤ教の神学者も、キリスト教徒が弁証論を書き、自らの宗教のために称賛の書を書くことを、善い、高尚なことであると捉えるであろう。これに対して、ハルナックは異議を申し立て、弁証論を歴史として偽り、それが歴史的な不正に対して武器となると信じたに過ぎない（Baeck [1901], S.119）。

確かに、ベックにはキリスト教の母体としてのユダヤ教を誇大視する傾向が見られる。それは、彼が後に書くことになる『ユダヤ教の本質』の中で、自然宗教には欠けている道徳を実質的な内容とする純粋な倫理的宗教としてユダヤ教を見なすあり方にも見られるであろう⁴¹。この点においては、ベック自身にも、ユダヤ教を歴史的に語りながら弁証論として分析する危険がないわけではない。しかしながら、ベックに拠れば、ユダヤ教的な土壌でイエスが教え、福音を宣べ伝えた歴史性を歪曲するハルナックの立場は誤りであって、ベックはキリスト教と福音を「歴史」的な立場で捉え、歪んだ弁証論から解放し、彼自身の捉えた一つの宗教の「本質」への道筋を模索しようとしたと言える。

7. 結語

以上のように、ベックがハルナックの書物に対して指摘したものは、「歴史家を騙った弁証論的な意図」と「ファリサイ派理解に見られるユダヤ文学とユダヤ学の考慮不足」であった。また、ハルナックはキリスト教の独自性と価値を弁証論的に描き出すために、ユダヤ的なものと福音の価値を分離させ、非「歴史家」的姿勢によって「キリスト教の本質」を探求しようとした。しかし、歴史家は本来「かの時代」の重要な事柄と「我々の時代」の関心とを区別し、二つの事柄が時として矛盾や相違（場合によっては歴史家にとって不都合なもの）を孕む場所で「本質」を探求しなければならない。それにもかかわらず、ハルナックは両者を混同し、「我々の時代」における弁証論的な意図を優先させた。ベックはこのような批判を通じて、その後ドイツで大きな災禍に発展することになる、ユダヤ教の一面的理解（アンチ・セミティズム）に対して警鐘を鳴らしたのである。

¹ 本稿は、2010年9月16日に行われた日本組織神学会2010年度大会のシンポジウム「レオ・ベックとアドルフ・ハルナック ―『キリスト教の本質』批判論文をめぐる』において発題した内容を加筆・修正したものである。

² Adolf von Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte Band I-III*, Tübingen 1886-1890. 尚、現在広く読まれているのは1909年に増補版となった第4版もしくは第5版で

ある。

³ Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, Leipzig, 1900. 本稿では、レントルフが注釈を付した 1999 年に発行された版 (Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, herausgegeben und kommentiert von Trutz Rendtorff, Gütersloh, 1999) と、オストヘーフェナーが 2005 年に公にしたもの (Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, herausgegeben von Claus-Dieter Osthöfener, Tübingen, [2005], 2007) の二つの史料を参照する。また、本稿で引用するハルナック『キリスト教の本質』の頁数については、上掲の二つの書物が呈示している原著の頁数を用いる。尚、山谷氏の邦訳も参照させて頂いた。ハルナック『キリスト教の本質』山谷省吾訳、玉川大学出版部、1977 年。

⁴ Leo Bäck, “Harnack’s Vorlesungen über das Wesen des Christenthums”, in: *Monatsschrift für Geschichte und Wissenschaft des Judenthums*, 45, Breslau, 1901, S.97-120. この批判論文の邦訳については、拙訳を参照。レオ・ベック「ハルナックの講義『キリスト教の本質』批判 (1901)」(聖学院大学総合研究所編、津田謙治訳、『聖学院大学総合研究所紀要』、no.50、2011 年)、231-257 頁。本稿における引用も、この拙訳と 1901 年版の原文に従った。尚、ベックはこの論文を著した翌年 (1902 年) に、同じ主旨の内容で議論を若干拡大した論文も発表しているが、これに関しては本稿で後述の議論を参照。

⁵ Uriel Tal, “Theologische Debatte um das „Wesen“ des Judentums”, in: *Juden im Wilhelminischen Deutschland 1890-1914*, herausgegeben von Werner E. Mosse, Tübingen, 1976, S.599-601; Trutz Rendtorff, “Einleitung zu Harnacks „Wesen des Christentums“”, in: *Das Wesen des Christentums*, Adolf von Harnack, herausgegeben und kommentiert von Trutz Rendtorff, Gütersloh, 1999, S.32-33; Wolfram Kinzig, *Harnack, Marcion und das Judentum: Nebst einer kommentierten Edition des Briefwechsels Adolf von Harnacks mit Houston Stewart Chamberlain*, Leipzig, 2004, S.21-22.

⁶ ハルナックとベックの実現されなかった会談については、ヴィーゼ (Christian Wiese) とリヒャルト (Werner Licharz) の監修の下でコシエル (Ansgar Koschel) が書き上げたフィクションがある。Licharz, Werner, “Ein Gespräch, das es nie gab: Adolf von Harnack und Leo Baeck”, in: *Leo Baeck- Zwischen Geheimnis und Gebot: Auf dem Weg zu einem progressiven Judentum der Moderne*, herausgegeben von Walter Homolka, Karlsruhe, 1997, S. 175-178.

⁷ 『キリスト教の本質』に付せられた 4 万 5 千部以降の序文を参照。

⁸ Leo Bäck (Baeck), *Harnacks Vorlesungen über das Wesen des Christentums*, Sonderabdruck aus der „Monatsschrift für Geschichte u. Wissenschaft des Judentums“, Zweite vermehrte Auflage, Breslau, 1902. ベックが 1901 年に書いた第一版が 24 頁 (S.97-120) であるのに対し、こちらの第二版は 27 頁 (S.5-31) である (表紙および序文を除く)。一頁あたりの文字数が異なるので (例えば、第一段落は全く同じ内容であるが、第一版は 9 行、第二版は 8 行である) 分量については単純に比較できないが、実質的にはそれほど大きく内容に変更はない。変更された箇所は、動詞の単数形と複数形の訂正や、名詞の言い回し、註の追加 (8 箇所) や内容変更、そして本文に 2 段落ほど議論が追加されている。

⁹ Leo Baeck, “Das Wesen des Judentums”, in: *Leo Baeck Werke Band 1: Das Wesen des Judentums*, herausgegeben von Albert H. Friedlander und Bertold Klappert, München, 2006, S.33-314. この『レオ・ベック著作集 1』には、初版の 1905 年に出版されたものも収められている (S.315-421)。また、現存する有賀氏の邦訳は、初版ではなく改訂版が基になっている。レオ・ベック『ユダヤ教の本質』有賀鐵太郎訳、全国書房、1946 年。

¹⁰ Tal [1976], S.601; 加納和寛「ハルナック『キリスト教の本質』におけるユダヤ観」(日本基督教学会編、『日本の神学』第 49 号、2010 年)、53-70 頁 (特に 58 頁を参照); 湯田豊「ユダヤ教の本質：神、トーラ、およびイスラエル」(『現代思想』第 22 号、青土

社、1994 年)、276-301 頁 (特に 279-280 頁を参照) など。もちろん、当時のユダヤ教を学問的に位置付けるための弁証的な意義を模索することも契機の一つと見なされている。Christian Wiese, “Ein unerhörtes Gesprächsangebot: Leo Baeck, die Wissenschaft des Judentums und das Judentumsbild des liberalen Protestantismus“ in: *Leo Baeck 1873-1956: Aus dem Stamme von Rabinnern*, herausgegeben von Georg Heuberger und Fritz Backhaus, Memmingen, 2001, S.147-171. 特に 156 頁を参照。

¹¹ Baeck [2006], S.29.

¹² 「キリスト教とは何であるか、それは何であったか、それは何になったか」(Harnack [1900], S.4) という問いがハルナックの『キリスト教の本質』の主題であり、この問いは宗教の本質全体へと志向しているが、彼は本書でキリスト教のみに限定している。尚、この問いかけはアリストテレスに遡る古典的な本質概念に対応しているが、これに関しては水垣氏の講演を参照した。水垣渉『「キリスト教とは何か」の問いをめぐって」(日本基督教学会編、『日本の神学』第 49 号、2010 年)、7-31 頁 (特に 14-17 頁を参照)。

¹³ Harnack [1900], S.4.

¹⁴ Harnack [1900], S.4; Baeck [1901], S.97. ここで、弁証論的な立場を取らないとするハルナックの主張を、ベックは単なる理想論 (ein blosses Ideal) に過ぎないと批判している。もっとも、ハルナック自身も専門家に向けた議論をこの『キリスト教の本質』の中で十全に展開している訳ではないため、この著作のみからハルナックの立場を導き出すのは難しいであろう。Cf. 水垣 [2010], 27 頁。

¹⁵ Harnack [1900], S.33; Baeck [1901], S.98-101.

¹⁶ 『キリスト教の本質』の概略とプロテスタント側及びユダヤ教側からの反応と理解に関しては、上述のレントルフやラッチョウの解説を参照した。Rendtorf [1999], S.7-35; C. H. Ratschow, Christentum V. Wesen des Christentums, in: *Die Religion in Geschichte und Gegenwart*, Band 1, herausgegeben von Kurt Galling, 3te völlig neu bearbeitete Auflage, Tübingen, [1957], 1986, S.1721-1729 (現在、RGG の第四版が刊行されているが、「キリスト教の本質」の項目は少なくとも独立して扱われていない)。特に、ユダヤ教側から見た『キリスト教の本質』に関して詳しいものとして、タールやヴィーゼを参照。Tal [1976], S.599-632; Wiese [2001], S.149-155. ヴィーゼはユダヤ教側からのハルナックへの批判として、ベルリンのラビであったエッセルバッハー (Joseph Eschelbacher [1848-1916]) や同じくケーニヒスベルクのラビであったペルレス (Felix Perles [1874-1933]) などに触れており、またベックの立場も詳しくまとめている。

¹⁷ Baeck [1901], S.98.

¹⁸ Harnack [1900], S.9.

¹⁹ このようなハルナックの特徴は、彼が自分の師であるアルブレヒト・リッチェルから受け継いだ遺伝的欠陥であるとベックは批判する。リッチェルの立場は形而上学的態度を批判してキリスト教神学を、神学以外の他の要素を排除することによって純化する立場に立脚している。そのような態度から叙述されたリッチェルの「歴史」は、独善的であり、それをハルナックが引き継いでいるとベックは指摘する (S.99-100)。リッチェルとハルナックとの関係については、深井氏の研究を参照。深井智朗『十九世紀のドイツ・プロテスタンティズム ― ヴィルヘルム帝政期における神学の社会的機能についての研究』、教文館、2009 年、176-229 頁。

²⁰ Harnack [1900], S.35.

²¹ Harnack [1900], S.34-35; Baeck [1901], S.100-102. このようなハルナックの立場は、「弁証家が歴史家〔の立場〕を撃退」(S.102) してしまったとベックは捉えている。Cf. Wiese [2001], S.152.

²² Baeck [1901], S.101-103.

²³ Baeck [1901], S.103.

²⁴ Baeck [1901], S.105.

²⁵ ベックによるハルナックの『キリスト教の本質』批判として頻繁に指摘されるのは、この「ファリサイ派」理解に関するものである。しかし、実際にベックが行った批判は、単に「ファリサイ派」に関する事柄だけでなく、ハルナックが「かの時代」のユダヤ学全

体について誤った、ないしは不足した知識に依拠していることに向けられている。cf. Albert H. Friedlander, *Leo Baeck: Teacher of Theresienstadt*, New York, 1991, pp.27-60.

²⁶ Harnack [1900], S.33. ここでハルナックが、ファリサイ派の目を通じて捉えた、専制君主 (Despot) としての神の表象は、後に彼がマルキオンの目を通じて捉えた旧約の神 (ハルナックはこの神に対しても“Despot”という語を用いている) に類比される。Adolf von Harnack, *Marcion: das Evangelium vom Fremden Gott*, [1921], 2te, [1924], Darmstadt, 1996, S.100.

²⁷ ハルナックに拠れば、イエス自身は律法や礼拝的な儀式によって行為される善き行いと、自らの中に目的を持つ愛による行いとを区別したとされる。Harnack [1900], S.45-46.

²⁸ Harnack [1900], S.33.

²⁹ Baeck [1901], S.106. ベックはここで、アキバラの他にも、ヒッレルやシムライなど「民族の公的な指導者たち」が、タルムードから崇高な宗教的かつ道徳的教説を説いていたことを強く主張している。

³⁰ Baeck [1901], S.112-113. ベックは後に、『ファリサイ派』という書物 (Leo Baeck, *Die Phariseer: Ein Kapitel jüdischer Geschichte*, Berlin 1934) を著し、その中で、正しいユダヤ教史及びキリスト教の起源理解のために「ファリサイ派」という言葉を明らかにすることの意義を説いている (S.7)。ただし、本節で扱われたファリサイ派と貧困などに関する主題はこの書物の中ではほとんど触れられていない。ファリサイ派の研究については依拠する史料に関する問題が指摘されるが、ベックはここで (註ではなく付記の中で) ヨセフス、ミシュナーやタルムード (エルサレム及びバビロニア)、そしてマタイ福音書や使徒行伝などの新約聖書を挙げている (S.74-84)。

³¹ “Staturarisches” を「律法的」としたのは山谷氏の邦訳を参照した (山谷 [1977], 71 頁)。本来は「規則に関するもの」であるが、律法の細則を説くファリサイ派の立場を含んでいると捉えられる。

³² Harnack [1900], S.41. 尚、この引用箇所はベックが批判論文の第二版で新たに挿入した段落に含まれている (Baeck [1902], S.12-13)。この段落での批判は、特に自分の宗教の独自性を説くハルナックの立場に向けられている。

³³ Baeck [1901], S.112.

³⁴ マタイによる福音書 19 : 21.

³⁵ Baeck [1901], S.112-113.

³⁶ キリスト教の福音とユダヤ教的伝統との関連性の例として、このようなファリサイ派の例の他に、ベックは「天の国がここかしこではなく、我々の内側にある」 (Harnack [1900], S.39) というハルナックの指摘が既にエレミヤやエゼキエルの中で極めて明白に語られていた考えであると指摘している (Baeck [1901], S.113)。

³⁷ ベックはこの批判論文の中で、リツチュル (Albrecht Ritschl [1822-1889]) やヴェルハウゼン (Julius Wellhausen [1844-1918]) の名を挙げている。

³⁸ レビ記 19 : 18, 34. Cf. Baeck [1901], S.115.

³⁹ イザヤ書 53 : 1ff. Cf. Baeck [1901], S.116.

⁴⁰ マタイによる福音書 21 : 28-32. 尚、引用文の中の省略箇所はベックによる。

⁴¹ Baeck [1922], S.56-57.

(つだ・けんじ 西南学院大学国際文化学部・准教授)